

〔基調講演&ワークショップ〕

欧州における継承日本語教育の意義と実践

—複言語・複文化主義社会における継承日本語教育を考察する—

フックス・清水 美千代（バーゼル日本語学校）

「継承語とは何か?」「欧州における継承日本語教育とはどのようなもので、どのような意義があるのか?」という問いに答えられる人は少ない。「継承語」という言葉自体が社会に定着しておらず、この言葉に抵抗を感じない人々もあり、できるだけ他の表現を試みようとする動きもある。ただ、今回の私の講演では、海外に住み、両親が日本語話者、あるいは父親か母親が日本語話者の子どもが親の言葉である日本語を第1言語というよりは第2言語として学習する日本語を「継承日本語」と定義する。

継承日本語教育は、日本政府の政策のもとで日本国民として日本で生活できる人になるために行われる国語教育とは異なった日本語教育であり、さらに義務教育でもない。また、継承日本語を学ぶ子どもたちは、様々な言語環境の歴史と言語背景を持った子どもたちで、おのずから日本語能力も様々であり、日本語学習の目標も各家庭で異なる。そのような子どもたちに過去36年間、小学1年生から成人に至るまでの生徒の日本語学習を支えてきた教師の立場から、継承日本語教育の実際と今後の展望を述べたいと考える。

また、欧州での継承日本語教育は、欧州における言語教育の一つであることを忘れてはならない。欧州では、日本語教育はマイノリティ言語教育の一つである。欧州評議会は人権、民主主義、法の秩序による欧州社会の平和な統合を目指す一つの重要な政策の一つとして複言語・複文化能力を持つための言語教育を推進してきている。欧州においては単一の言語が大切なのではなく、それぞれの言語（第一言語、第二言語、外国語、マイノリティー言語の全て）を対等なものとする。このような視点から考えると、継承日本語教育は、まさに複言語・複文化能力を持つための教育であるとも言える。

世界中で様々な目的での言語教育が行われており、かつて、植民地では支配国の言語が強制的に学習されたこともある。また単一言語のみが優先されている国は現在も少なくない。私どもは欧州という地域に住む人間として、民主主義に基づく社会の中での言語教育の重要性を知り、言語教育の真の目的とは何かという問いを常に忘れず、より良い言語教育を展開する必要がある。それには常に教師としての学びが大切と考える。

学習者のアイデンティティ確立の支援と異文化理解が継承語教育の特徴的な点として挙げることができるが、これは継承語教育のみでなくすべての言語教育においても行われることが理想と考える。継承日本語教育は、子どもが成長していく過程で日本語学習を支援していく教育である。21世紀においては、子どもたちが将来大人となった時に、欧州評議会の目標とする、様々な人々とコミュニケーションができ、人権を守る民主主義の平和な社会と地球の自然環境を守る社会の構築に貢献できる市民となることを考慮した教育が必要である。

ワークショップでは、複言語・複文化能力をつけるための、学習者中心の授業活動を考慮した教材や楽しみながら学習ができるゲームなどの作成を考えている。